

咀嚼・咬合論

単純・明解咬合論

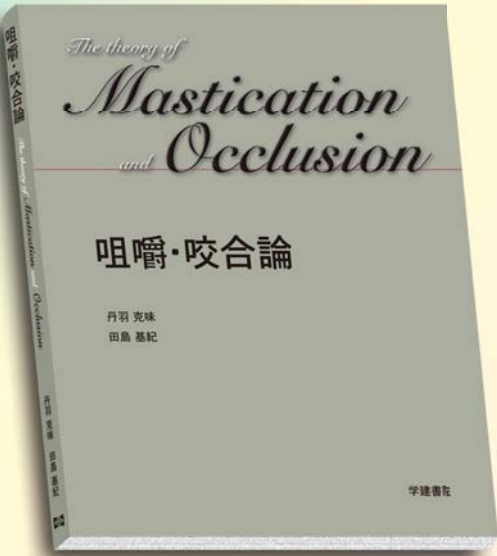
- ◆「正しい咬合とは、臨床で真に必要な顎位とはなにか」、あらゆる症例に適用できる咀嚼運動理論(咬合理論)がはたして存在するのか長年悩んできた著者が、ようやく1つの結論に到達。
- ◆歯ぎしりや顎関節症の治療に関する咬合も、インプラントや小さなインレーの咬合も、まったく同じ理論で治療が可能です。
- ◆正しい咬合理論を臨床に適用してこそ、患者さんが満足できる治療につながります。

Contents

Prologue すべての症例に適用できる理論の確立を

基礎編 咬合の確立と構成	Part3 咬合面の害	Part7 隣接歯の関係
Part1 咬合面は変化する	Part4 咬耗の功害	Part8 顎関節の機能
Part2 咬合面は、なぜ存在するの	Part5 咬合性外傷の存在とは	Part9 中心位と中心咬合位
	Part6 咬合平面の形	Part10 中心位への誘導
理論編 新しい咀嚼運動理論	Part12 リンガライズドオクルージョン	Part15 かみ合わせの確立と安定
Part11 顎の動きは咬合面	Part13 理想的なかみ合わせ	Part16 咀嚼とは
で決まる	Part14 正常なかみ合わせの要件	Part17 新しい咀嚼運動論
実践編 新理論からみた臨床	Part19 かみ合わせの診断と治療	Part21 咬合器の役割
Part18 歯科治療のもたらすもの	Part20 かみ合わせの調整	Part22 ブラキシズムの治療
		Part23 顎関節症の治療

Epilogue 真の理論とは、すべての症例に適用できる理論



著 明海大学歯学部非常勤講師 丹羽克味
宮崎市開業 田島基紀

AB判 2色刷 223頁
定価(本体8,000円+税)
ISBN978-4-7624-0667-6

の顎位です。

中心位の自由度という考え方

ドーンは、著書の中でロングセントリックについて次のように述べています。

「患者さんが「先生が顎を後方に押したときには、歯がうまくかみ合うが、自分自身で閉じたときには前歯部だけが当たる」と訴えている場合には、必要なロングセントリックを与えなかったときにしばしば生じる、制限された咬合と同じものになっている」……さらに「ロングセントリックとは、中心位からの自由度をいうのであり、中心位での自由度をいうのではない」。

ロングセントリックとは、図103に示すように機能咬合が接する対合歯の咬合面の一部を平坦にし、この間を自由に滑走できるようにしたものです。

最初の記述の「先生が顎を押したとき……前歯部だけが当たる……」という現象は、これまで記したように、中心位の顎位設定に誤りがあり、下顎最後位として咬合を構築したことに原因していることは容易に想定されます。

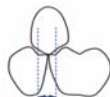
次に「中心位の自由度……」の記述ですが、このようにことばの使い分けはできます。しかし現実と同じことです。それは中心位の自由度(度)が必要なことを意味しているのです。なぜなら顎関節は機械的な蝶番ではなく、そこにはいわゆる曖昧さが存在します。この曖昧さを咬合にももたせることは、咬合面を自由に滑走できる範囲を有することです。そうすることによって顎関節は中心位のリラックス状態を維持し、結果安定することになります。したがってロングセントリックのような自由に滑走できる範囲を咬合面に形成することは、顎関節の生体構造のもつ動きとマッチすることになります。このような咬合面は、咬耗した歯の咬合面と共通するものです。

中心位の水平的自由度

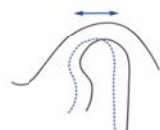
では中心位の水平的な自由度とは、臨床的にどのような状態をいうのでしょうか。

側方滑走運動を行うと、作業側の下顎頭は回転し、非作業側の下顎頭は前方に移動します。しかしごく初期の前方や側方運動では、非作業側の下顎頭が下顎窩内で水平に動けるわずかな範囲があります。この範囲内における下顎頭の動きを咬合面上でみると、作業側と非作業側が、ともにわずかに水平に前方や側方に滑走できるのです。すなわち図104に示すように、「顎関節における下顎頭と下顎窩の関係は蝶番のように緊密ではなく、わずかに水平的な自由度(ガタ)が存在し、その自由度を咬合面に再現することが顎関節の安定にとってきわめて大切なことである」と考えています。またこの自由度を咬合面につけたからといって咀嚼機能を低下させることはありません。なぜなら、その咬合面は咬耗した咬合面と同じだからです。

前後左右に自由に滑走できる咬合面を構築することは、顎関節の曖昧な構造を咬合が反映していることとなります。この咬合構築によって顎関節



103 ロングセントリック



104 中心位の水平的自由度の臨床的意味
下顎頭が下顎窩内で水平に移動できる範囲が水平的自由度です。

Part 9 中心位と中心咬合位 69

はごく自然な状態を維持することになり、それが顎関節の安定につながると考えています。咬耗した咬合面は決してポイントセントリックではありません。

中心位の垂直的自由度

これまで中心位の水平的な自由度の意義について、その臨床的な必要性を説明しました。中心位の水平的自由度が存在するのであれば、垂直的な自由度は存在するのでしょうか。そのことについて考えてみたいと思います。

著者の中心位の定義をもう一度提示します。中心位とは、下顎頭が下顎窩内で最も安定した位置、すなわち下顎窩内のほぼ中心に位置するところで、咀嚼筋や韧带が最も安定しリラックスした状態にある下顎頭と下顎窩の位置関係である。としました。リラックスした状態の顎位とは、すなわち中心位には許容されるわずかな幅があると考えることができます。

これまで中心位の1つが下顎安静位であることを説明しました。次に中心咬合位の顎位を考えてみます。中心咬合位は下顎安静位から2~4mmかみ込んだところにあります。中心咬合位は下顎安静位の下顎頭と下顎窩の位置関係と変わりのないことも話しました。中心咬合位の顎関節における下顎頭と下顎窩の位置関係が下顎安静位のそれと同じとすれば、中心咬合位も中心位の顎位の1つになります。

すなわち下顎安静位から中心咬合位までの間の顎位が中心位ということになります。したがって「2~4mmの安静空隙が、中心位の垂直的な自由度」と考えることができます。

それでは中心位と中心咬合位では、なにが違うのかについてはPart 9で説明しました。そのことを踏まえて、次に顎の動きと各顎位の臨床的な意味を考えてみます。

顎の動きと顎関節の関係

開口から閉口に至る顎の動きと顎関節の関係を図105に示します。

開口位では、下顎頭は前下方に移動し、最大開口位では関節結節を越える位置まで移動しています。この開口位置では開口筋の舌骨下筋群は収縮し、反対に閉口筋である咬筋、内側翼突筋そして側頭筋、さらに韧带は伸展させられた状態です。

下顎安静位では、下顎頭は下顎窩内の最も安定した位置にあり、すべての咀嚼筋と韧带はリラックスした状態にあります。

中心咬合位では、この顎位の顎頭と下顎窩は下顎安静位と同様の位置関係で、下顎頭は下顎窩内の安定した位置にあります。

中心咬合位が下顎安静位と唯一異なる点といえば、韧带はリラックスしているのに対し咀嚼筋は活動状態にある、ということです。

低位咬合位では、中心咬合位より低位となった咬合状態では、下顎頭は下顎窩後壁を圧迫するように後方に移動します。咀嚼筋の咬筋、内側翼突筋そして側頭筋の筋活動は始まっています。

中心位という顎位

中心位は、私たちが臨床を行ううえで重要な顎位です。その中心位という顎位の臨床的意義を理解することは、臨床の成否を決すること



開口位



下顎安静位



中心咬合位



低位咬合位

105 開口から閉口にいたる各顎位と顎関節の関係

70 基礎編 咬合の確立と構成